

ミツカン水の文化センター
第28回（令和四年度）定点調査
「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

—28年目のリニューアル—

生活者の水への関心度を明らかにするための新規調査を実施

【調査期間：2022年6月3日(金)～8日(水)／対象エリア：東京圏・大阪圏・中京圏】

ミツカン水の文化センター（株式会社Mizkan Partners 広報部内）では、今年6月に、東京圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）、大阪圏（大阪・兵庫・京都）、中京圏（愛知・三重・岐阜）の在住者1,500名を対象とした「水にかかわる生活意識調査」を実施し、集計結果をまとめました。

本調査は、1995年の第1回以降、日常生活と水のかかわりや意識を明らかにすることを目的とした定点調査として、継続性を重視しながら今年で28回目を迎えました。そのような中、近年の調査結果より、生活者と水との距離が遠くなってきている傾向が感じられたことから、今回、水への関心や感謝、水に関する体験や経験といった、水そのものに対する意識および実態を把握し、生活者の水への関心度を明らかにする設問を追加するなど、設問構成を見直しました。リニューアルした本調査を通じて、生活者が水に興味・関心を持つきっかけづくりに貢献していきたいと考えております。そして今後も本調査を継続し、生活者の水に対する意識が変わるきっかけや、その意識の変化がどのような行動に結びつくのかを探究していくことで、「水」の大切さを伝えていくセンターの活動に活かして参ります。また、今年も、当センターのアドバイザーであり、東京大学 大学院工学系研究科 教授の沖大幹先生に、調査結果の解説をいただきました。

なお、今年の調査データおよび過去（第1回～27回）の集計概要など詳細な情報は、ミツカン水の文化センターのホームページ（<https://www.mizu.gr.jp/>）で公開しています。

《調査結果》

【1】水への意識の度合いは、“大切さ＞ありがたさ＞関心”

…「大切だと思うか？」「ありがたさを感じるか？」「水への関心は？」に対し、YESの回答率は、それぞれ、94.6%、86.5%、64.6%との結果に。

【2】水に関心がある人の原体験は、子どもの頃に受けた水の教育？

…「子どもの頃に授業や家庭で水の大切さを教わった」経験について、水への“関心あり層”は54.3%と、“関心なし層”を大きく上回る。

【3】「下水道」が無い生活は耐え難い？

…日常生活で必要なものが「無い生活にどれくらい耐えられるか？」に対し、下水道は、「それ無し生活には耐えられない」を選んだ人が約8割。

◆沖大幹先生による解説 ～Oki's View～

【水 体 験】断水や濁水を経験したことがある人が4割近くもいる？

【罪 と 水】バスタオルだけは毎日洗いたい！

【何はなくとも】無いと困るサービス1位は、電気。水は？

【この件に関するお問い合わせ先】

ミツカン水の文化センター ホームページ内、お問い合わせフォーム（下記URL）よりお願いいたします。

<https://www.mizu.gr.jp/customer/group/mizu.html>

(TEL.03-3555-2607)

※ミツカングループでは、テレワーク勤務を推進しております。

誠に恐縮ですが、ホームページからのお問い合わせへのご理解とご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

《結果の抜粋と掲載ページ》

■ 調査概要	2ページ
■ 水への意識	
◇ 水への意識の度合いは“大切さ”> “ありがたさ”> “関心”…トピック【1】	3ページ
◇ 「水道料金」「節水や水の再利用」が水の2大関心事	3ページ
◇ 子どもの頃に「水辺でよく遊んだ」「水の大切さを教わってきた」経験者4割台	3ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki’s View～ ① 水体験	4ページ
◇ 水道水が飲めることへの幸福感、水の出っぱなしへの罪悪感、7割超が共感	4ページ
■ 水への関心有無による水意識	
◇ 水への“関心あり層”は「大切さ」「ありがたさ」をより感じている	
“関心なし層”は、ありがたさを感じていない人が3割超	5ページ
◇ 水に関心がある人の原体験は、子どもの頃に受けた水の教育？…トピック【2】	5ページ
◇ “関心なし層”は、水への感謝は無いが、出っぱなしには罪悪感	5ページ
◇ 節水を行う理由“関心あり層”は地球環境、“関心なし層”は家計をより重視？	6ページ
◇ 将来きれいな水が飲めるために必要なこと“関心なし層”は川や海的美観重視？	6ページ
■ 節水の意識と行動	
◇ 節水の意識と行動ともに昨年を大きく上回る	6ページ
◇ 日常生活で実践していることは項目ごとの取り組み率がやや上昇	6ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki’s View～ ② 罪と水	7ページ
■ 水道水に関する意識	
◇ 水道水の評価は、10点満点回答者の大幅増加で平均点が7点台に上昇	8ページ
◇ 水道水への不満20～30代は味、40～60代は料金により不満	8ページ
■ 水と生活・文化	
◇ 日常生活で無いと困るもののトップ3は1位「電気」、2位「上水道」、3位「食料」	9ページ
◇ 「下水道」が無い生活には耐えられないと思う人が約8割…トピック【3】	9ページ
◇ 耐えられる日数の平均は、最短「飲用水」1.6日、最長「スマートフォン」3.7日	9ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki’s View～ ③ 何は無くとも	10ページ
◇ 知っている祝日・記念日で「水の日」の認知率が過去最高を更新	10ページ

【調査概要】

第28回（令和四年度）「水にかかわる生活意識調査」

- ◆ 調査対象数 : 1,500人
- ◆ 調査対象者 : 東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20代から60代の男女
- ◆ 調査方法 : インターネット調査
- ◆ 調査期間 : 2022年6月3日(金)～6月8日(水)
- ◆ 回収数(人) :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合計		小計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

水への意識

Q.水への関心度は？（6択）

Q.水は大切だと思うか？（6択）

Q.水のありがたさを感じているか？（6択）

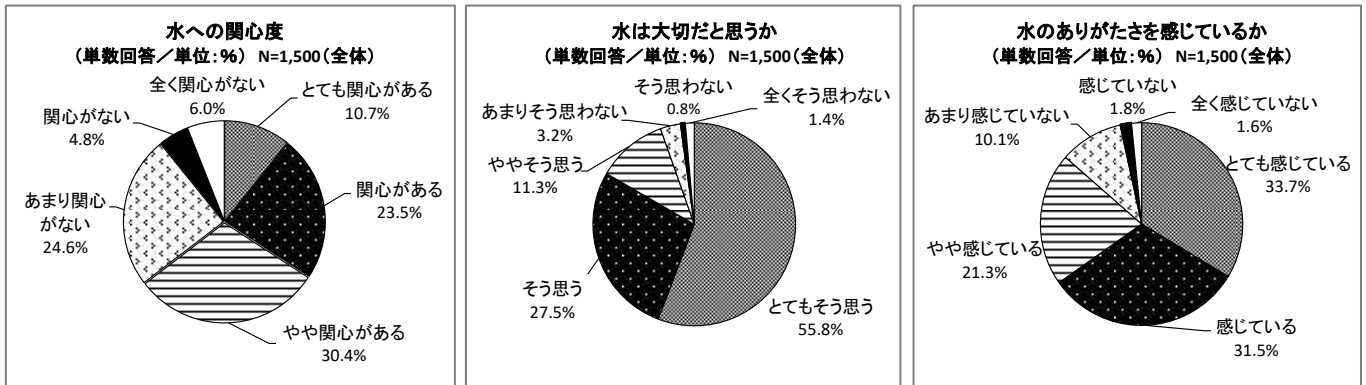
◇水への意識は、大切さ> ありがたさ> 関心。

まず、水にどの程度関心があるか聞いたところ、「とても関心がある」10.7%、「関心がある」23.5%、「やや関心がある」30.4%となり、これらを合計した“関心あり層”は64.6%でした。

次に、水は大切だと思うかをたずねたところ、「とてもそう思う」（55.8%）が半数を超え、「そう思う」（27.5%）、「ややそう思う」（11.3%）を合わせた“大切だと思っている人”は、全体の94.6%を占めました。

また、水のありがたさを日々の生活で感じているかについては、「とても感じている」（33.7%）、「感じている」（31.5%）、「やや感じている」（21.3%）を合計した“ありがたさを感じている人”が86.5%でした。

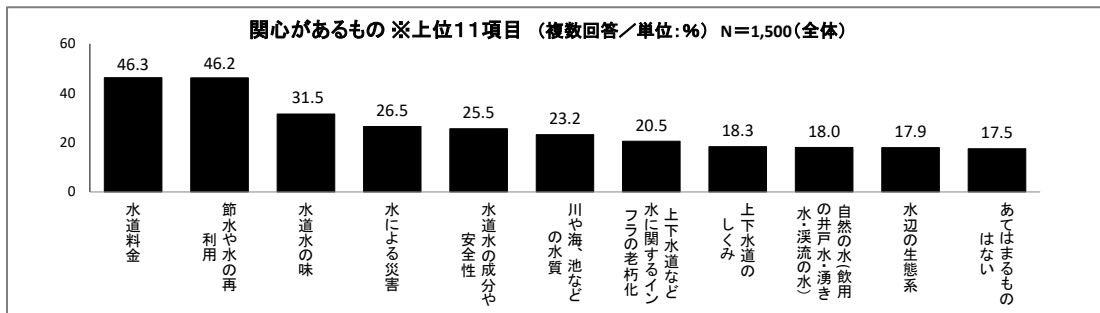
これらの結果を見比べると、大切さは大多数の人が認識しているものの、「ありがたさ」という感謝の気持ちになると若干減少、関心がある人はさらに少なくなり、“大切さ> ありがたさ> 関心”といった傾向がみられました。



Q.水について関心がある事柄は？（29択+その他+あてはまるものはない）

◇「水道料金」と「節水や水の再利用」が2大関心事。

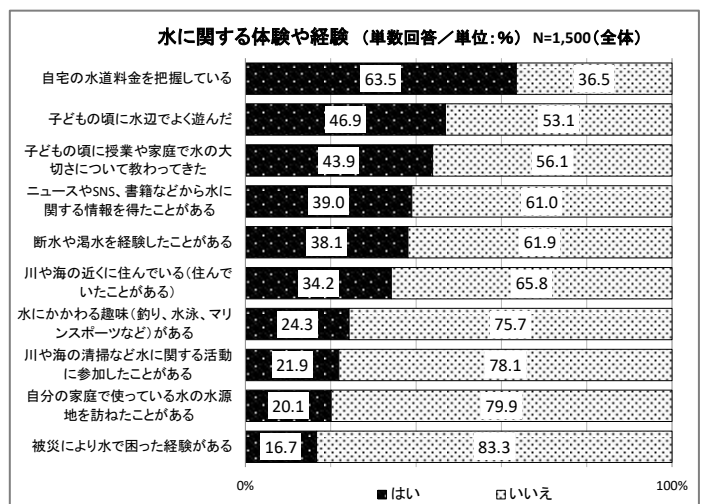
水に関するさまざまな事柄を選択肢にあげ、関心があることを選んでもらったところ、1位「水道料金」（46.3%）、2位「節水や水の再利用」（46.2%）が、ともに4割を超える2大関心事となり、以下は3位「水道水の味」（31.5%）、4位「水による災害」（26.5%）、5位「水道水の成分や安全性」（25.5%）と続きました。



Q.水に関する体験や経験の有無は？（それぞれ2択）

◇「水辺でよく遊んだ」「水の大切さを教わった」が4割台。

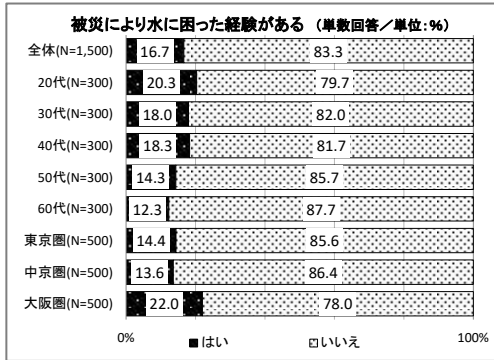
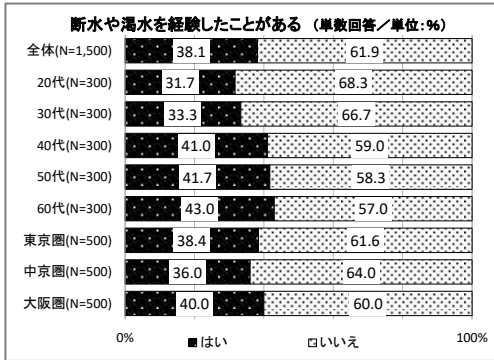
水にまつわる体験や経験に関する項目について、それぞれの体験・経験有無をたずねたところ、「はい」が最も多かったのは、「自宅の水道料金を把握している」（63.5%）で、「子どもの頃に水辺でよく遊んだ」（46.9%）や「子どもの頃に授業や家庭で水の大切さについて教わってきた」（43.9%）が4割台、「川や海の清掃など水に関する活動に参加したことがある」（21.9%）や「自分の家庭で使っている水の源地を訪ねたことがある」（20.1%）は2割程度でした。また、「断水や渇水を経験したことがある」人は38.1%、「被災により水で困った経験がある」人は16.7%となりました。



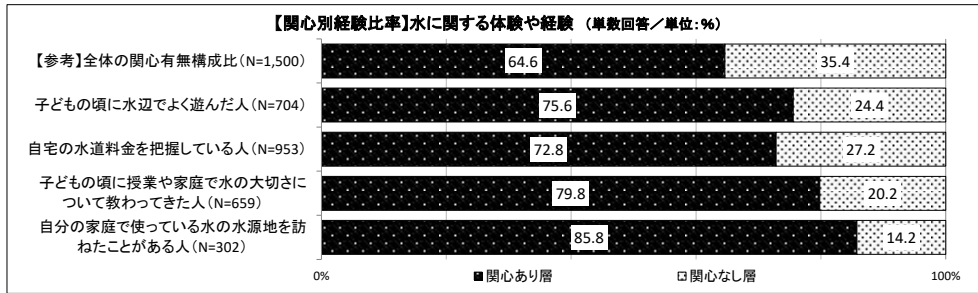
【水体験】

自宅の水道料金を把握していると答えた方が6割を超えた以外、水に関する体験、経験は半数を超えてはいない。しかし、断水や渇水を経験したことがある方が4割近くいる、というのは驚きである。20代30代で3割、40代以上で4割あまりと、年代による差はあまりなく、東京圏(38.4%)、中京圏(36.0%)、大阪圏(40.0%)の間でも大きな差は認められないため、特定の災害時の経験によるとも考えにくい。集合住宅では自然災害でなくとも停電、しかも点検など計画的な停電でも断水が生じ得るため、そうした際の経験が回答に反映されているのかもしれない。

一方で、被災により水で困った経験がある方も全体の1/6に達しており、こちらは東京圏(14.4%)や中京圏(13.6%)に比べて大阪圏(22.0%)が有意に高く、阪神淡路大震災の影響が思い浮かぶが、年代別には20代のみ20%を超えていて、60代では12%あまりとむしろ少なくなっており、2011年の東北地方太平洋沖地震による東日本大震災や2018年の大阪北部地震の記憶なのかもしれない。



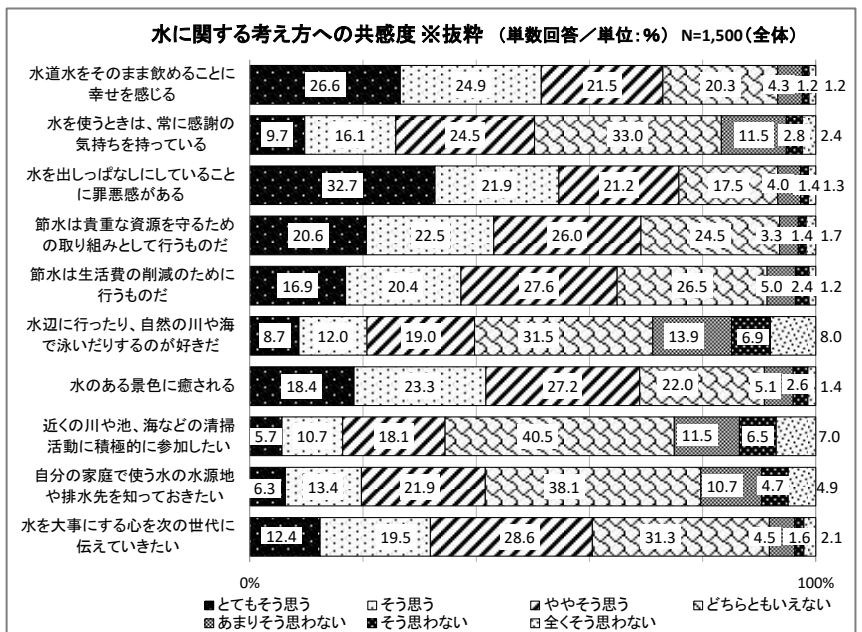
子供の頃に水辺でよく遊んだ、あるいは、自宅の水道料金を把握していると回答された方では7割超、子どもの頃に授業や家庭で水の大切さについて教わってきた方では8割弱、自分の家庭で使っている水の水源地を訪ねたことがあるでは8割超の方が水への関心がある層となっており、これらの間の相関関係が高いことがうかがえる。



Q.水に関する考え方への共感度は？(それぞれ6択+どちらともいえない)

◇水道水をそのまま飲むことへの幸福感や、水を出しっぱなしにすることへの罪悪感に、7割超が共感。

水に関する考え方への共感度を探るべく、いくつかの事柄をあげた上で、それぞれどう思うかを7択(とてもそう思う/そう思う/ややそう思う/どちらともいえない/あまりそう思わない/そう思わない/全くそう思わない)でたずねたところ、「水道水をそのまま飲むことに幸せを感じる」(72.9%)や「水を出しっぱなしにしていることに罪悪感がある」(75.8%)といった水への価値観を問う項目は、「共感する人」(「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」の合計)が多かった一方で、「水辺に行ったり、自然の川や海で泳いだりするのが好きだ」(39.7%)、「近くの川や池、海などの清掃活動に積極的に参加したい」(34.5%)、「自分の家庭で使う水の水源地や排水先を知っておきたい」(41.6%)などの行動を伴う項目は、3~4割台という結果でした。



水への関心有無による水意識

本調査では、これまで各設問に応じて、性別・年代別・居住地別などによる差異を交えてレポートしてきましたが、水への関心がある人とない人では、どのような違いがみられるのでしょうか。ここでは、今年調査したいくつかの設問について、関心の有無別による結果を紹介します。

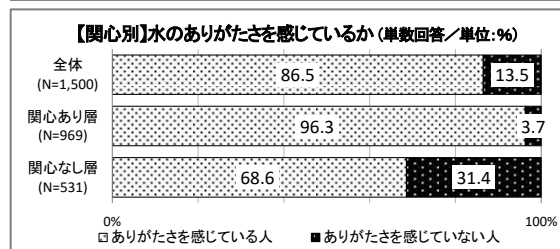
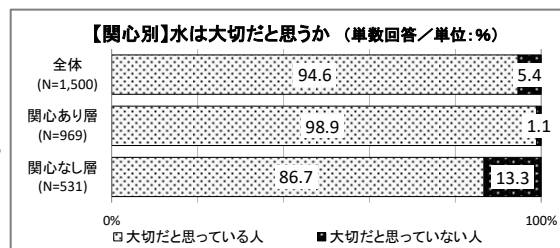
Q.【関心別】水は大切だと思うか？（6択）

Q.【関心別】水のありがたさを感じているか？（6択）

◇水への“関心あり層”は「大切さ」「ありがたさ」をより感じている。

“関心なし層”は、ありがたさを感じていない人が3割超。

関心の有無別に、水は大切だと思うかをみみると、“関心あり層”は“大切だと思っている人”の割合が98.9%、“関心なし層”（「あまり関心がない」+「関心がない」+「全く関心がない」）では86.7%となり、両者には12.2ポイントの差がありました。水へのありがたさを感じているかについては、“関心あり層”の“ありがたさを感じている人”が96.3%、“関心なし層”が68.6%で、その差は27.7ポイントと、さらに広がりました。言い方を変えれば、“関心なし層”の3割以上は、水へのありがたさを感じていないということになります。

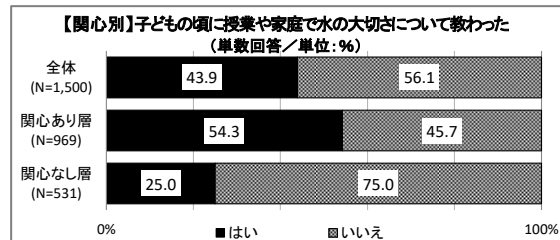
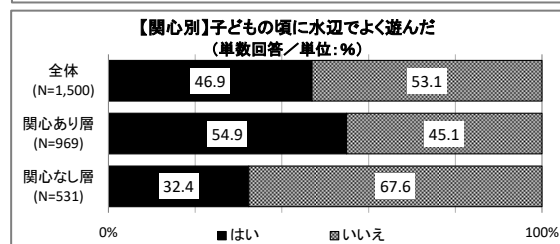
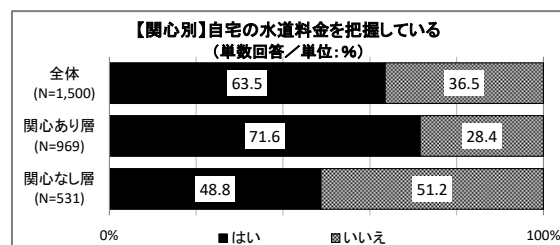


Q.【関心別】水に関する体験や経験の有無は？

（それぞれ2択）

◇水に関心がある人の原体験は、子どもの頃に受けた水の教育？

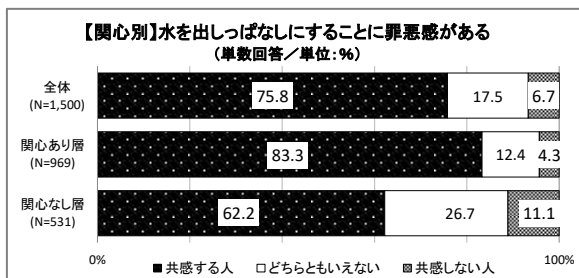
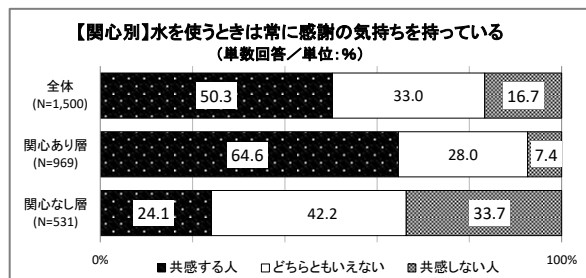
水にまつわる体験や経験について、“関心あり層”は「自宅の水道料金を把握している」（71.6%）、「子どもの頃に水辺でよく遊んだ」（54.9%）、「子どもの頃に授業や家庭で水の大切さについて教わった」（54.3%）の3項目で半数以上の経験がありました。一方、“関心なし層”は、「自宅の水道料金を把握している」（48.8%）、「子どもの頃に水辺でよく遊んだ」（32.4%）、「子どもの頃に授業や家庭で水の大切さについて教わった」（25.0%）など、いずれも大きな差がみられました。中でも、「子どもの頃に授業や家庭で水の大切さについて教わった」は、“関心あり層”が“関心なし層”を30ポイント近く上回っており、子どもの頃に水の大切さを学んだことが、水に関心がある人の原体験になっていることをうかがわせる結果となりました。



Q.【関心別】水に関する考え方への共感度は？（それぞれ5択+どちらともいえない）

◇“関心なし層”は、水への感謝は無いが、出しっぱなしには罪悪感。

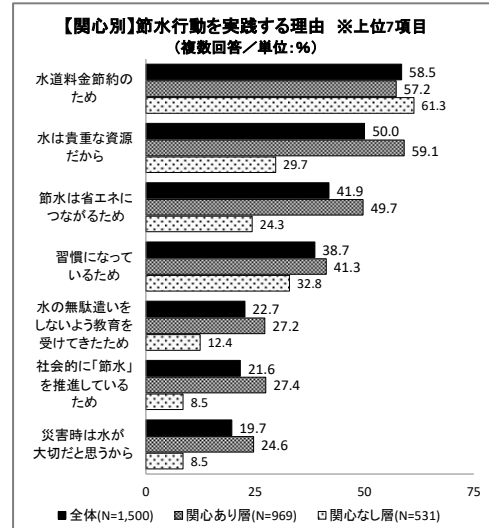
水への関心の有無別に、①「水を使うときは、常に感謝の気持ちを持っている」と②「水を出しっぱなしにすることに罪悪感がある」の“共感する人”（「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」の合計）をみみると、①は“関心あり層”が64.6%、“関心なし層”が24.1%、②はそれぞれ83.3%、62.2%でした。“関心なし層”は、①が4人に1人なのに対し、②は3人に2人が共感していることから、水への感謝の気持ちは無くても、水の無駄遣いに対する罪悪感は多少なりともあるようです。



Q.【関心別】節水行動を実践する理由は？（13択+その他+理由はない）

◇“関心あり層”は地球環境、“関心なし層”は家計をより重視？

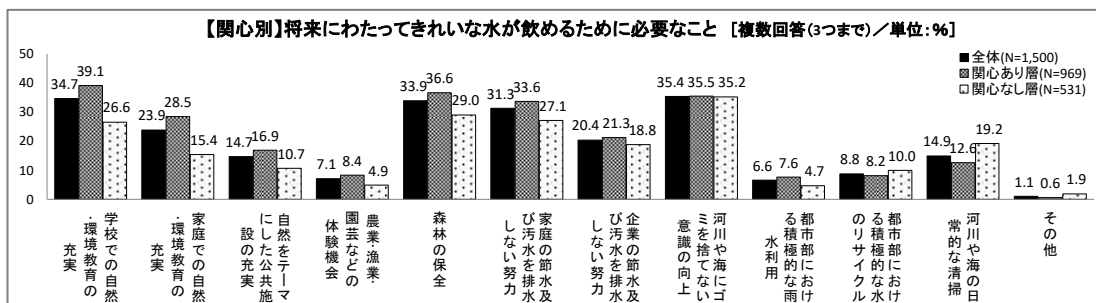
節水行動を実践する理由について、水への関心の有無別にトップ3を比較したところ、“関心あり層”は1位「水は貴重な資源だから」（59.1%）、2位「水道料金節約のため」（57.2%）、3位「節水は省エネにつながるため」（49.7%），“関心なし層”は1位「水道料金節約のため」（61.3%）、2位「習慣になっているため」（32.8%）、3位「水は貴重な資源だから」（29.7%）となりました。この結果からは、“関心あり層”は地球環境をより重視し、“関心なし層”は家計をより重視するという、両者の節水に対する考え方の違いを垣間見ることができます。



Q.【関心別】将来にわたってきれいな水が飲めるために必要なことは？（11択+その他）

◇“関心なし層”は川や海的美観を重視？

将来にわたってきれいな水が飲めるために必要なことは、「河川や海にゴミを捨てない意識」で“関心あり層”（35.5%）と“関心なし層”（35.2%）がほぼ同様の数値、「河川や海の日常的な清掃」では“関心なし層”（19.2%）が“関心あり層”（12.6%）を上回るなど、水辺的美観を保つことに対する“関心なし層”の関心の高さがうかがえる、興味深い結果がみられました。これらの項目については、今後の数値の変化に注目したいところです。



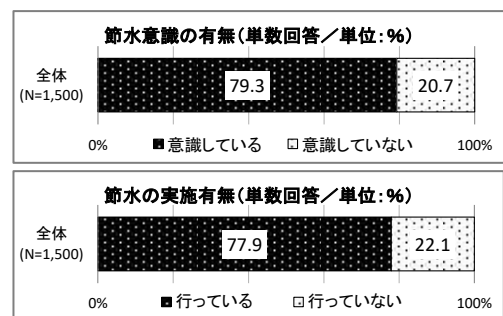
節水の意識と行動

Q.日常生活で節水を意識しているか？（2択）

Q.日常生活で節水を実施しているか？（2択）

◇節水意識と行動、ともに昨年を大きく上回る。

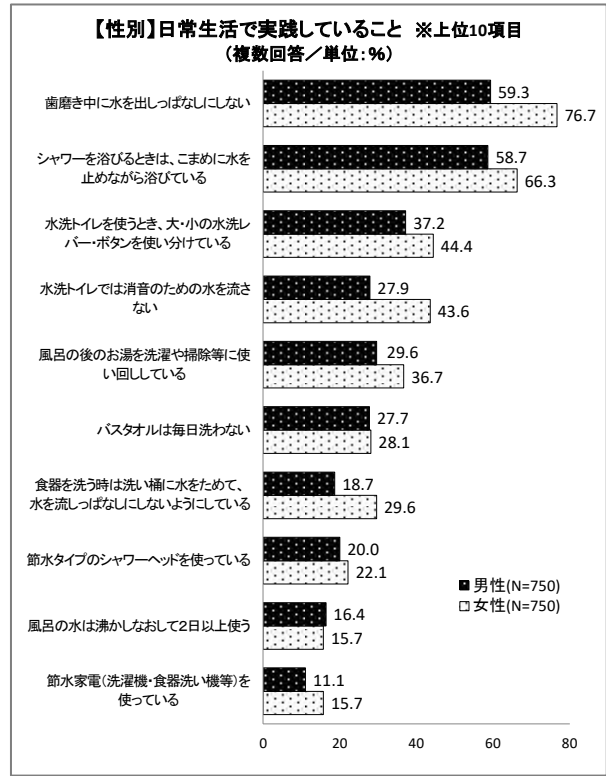
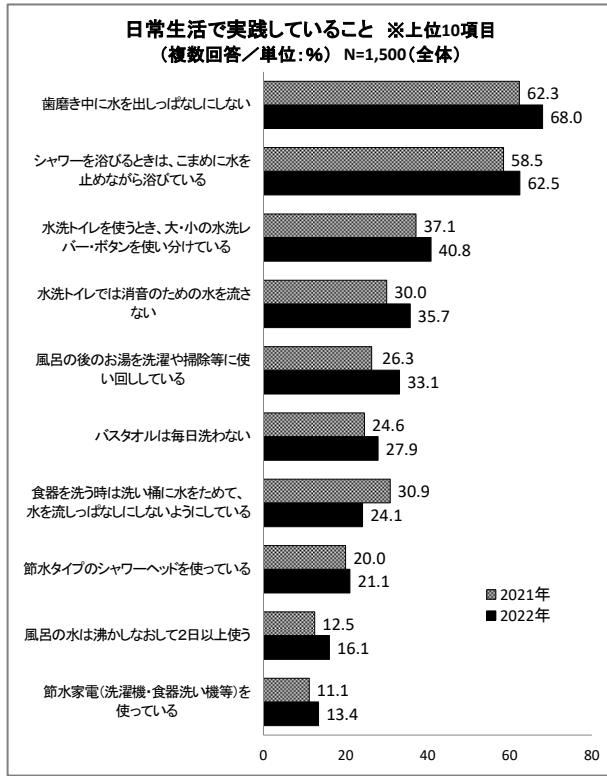
節水への意識と行動は、節水を「意識している」が79.3%で昨年（66.3%）から13ポイント増加、節水を「行っている」が77.9%で昨年（66.6%）から11.3ポイント増加と、いずれも昨年を大きく上回りました。この結果は、原材料価格などの高騰による昨今の値上げラッシュも少なからず影響しているかもしれません。



Q.日常生活で実践していることは？（14択+その他+実践していることはない）

◇各項目の取り組み率がやや上昇。

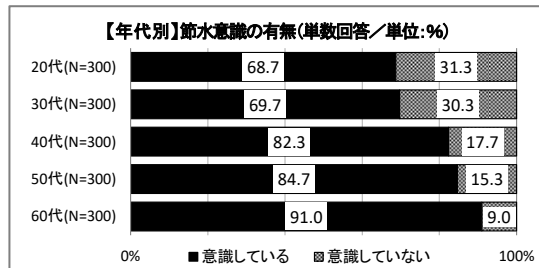
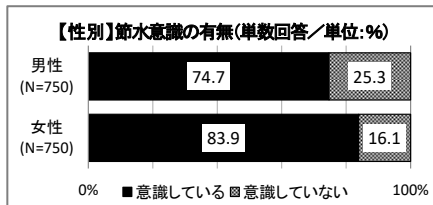
節水や水の再利用方法に関する項目を選択肢にあげ、日常生活で実践していることとして聞いたところ、1位「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」（68.0%）、2位「シャワーを浴びるときにこまめに水を止める」（62.5%）、3位「水洗トイレの大小レバー・ボタンを使い分ける」（40.8%）、4位「水洗トイレで消音のための水を流さない」（35.7%）、5位「風呂の後のお湯を洗濯や掃除等に使い回す」（33.1%）となり、これらの項目は、いずれも昨年より数値が増加。前述の節水実施率の上昇とともに、その取り組み率も上がっていることがうかがえる結果となりました。なお、昨年4位だった「食器を洗うときは水を流しっぱなしにしないようにしている」は、今回6.8ポイント減の24.1%で7位でした。



沖大幹先生による解説 ~Oki's View~ ②

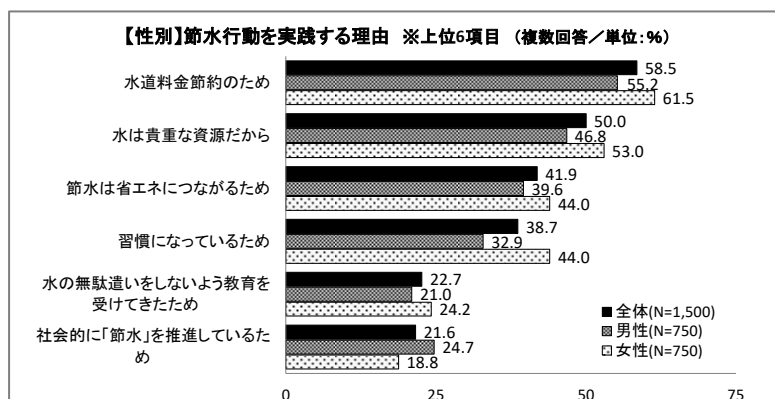
【罪と水】

暑い夏が常態化した昨今だが、関東以南の東南日本では夏は水不足のおそれもある季節である。昨年の調査に比べると節水意識は13ポイント上がり、8割近くが節水を意識していると回答しており、意識の低い20代でも7割近く、60代では9割以上が節水を意識していて、男女別では女性の方が10ポイント近く高くなっている。



水への関心が必ずしも高くない方々は、たいていの場合水への共感度も低い傾向にあるが、「水を出しっぱなしにすることに罪悪感がある」については、水への関心が低い層でも6割以上が「そう思う」側の回答をしており、目の前で水がジャージャーと音を立てて無駄に流れるのに対しては罪悪感を覚えるようである(5頁参照)。一方で、歯磨きやシャワーの最中に水を止めるに始まる日常生活における節水について、いずれも女性の方が実践度ははるかに高いものの、「バスタオルは毎日洗わない」だけは男女ほぼ同じ割合に留まり、バスタオルだけは毎日洗いたいという女性の気持ちが反映されている。

節水行動をとる理由は、水が貴重な資源だから、という5割の方を抑え、水道料金節約のためが約6割で1位。省エネにつながるから、が4割で3位。習慣になっているため4割弱で、教育の重要性を改めて感じる。多くは女性の方が理由として挙げている中で、「社会的に推進しているため」だけ男性の方が高くなっているのはなぜだろうか。



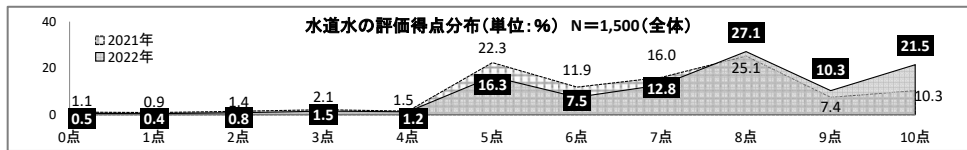
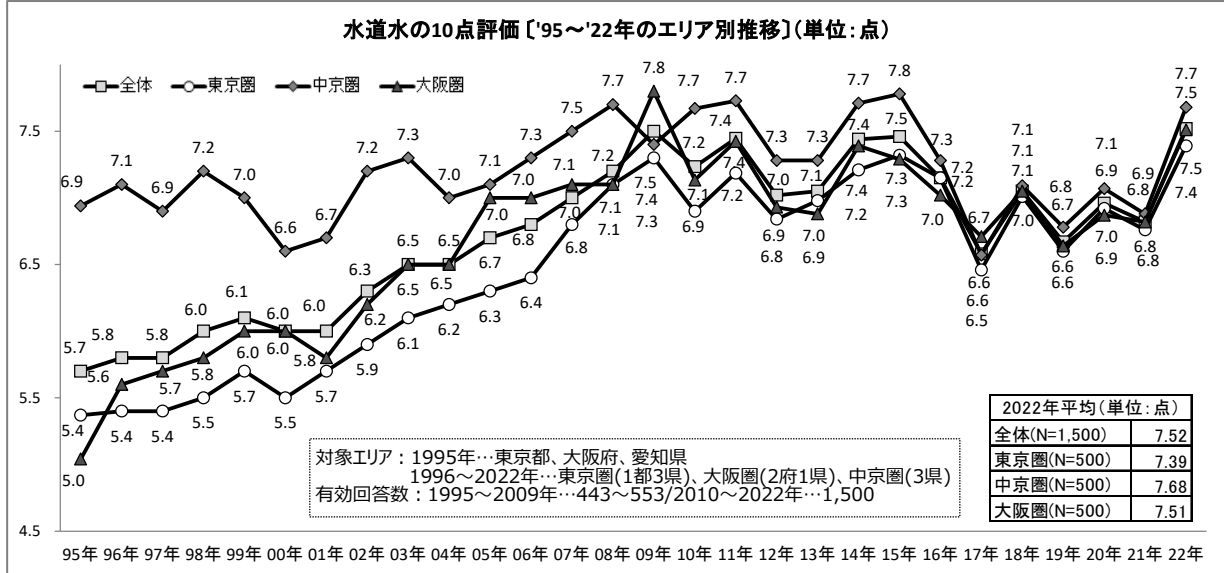
水道水に関する意識

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇10点満点回答者の大幅増加により、平均が7点台に上昇。

水道水の10点満点評価は、全体の平均が昨年比0.70ポイント増の7.52点でした。居住地別では、東京圏が0.63ポイント増で過去最高となる7.39点、中京圏が0.80ポイント増の7.68点、大阪圏が0.69ポイント増の7.51点と、いずれも昨年から大きく上昇しました。

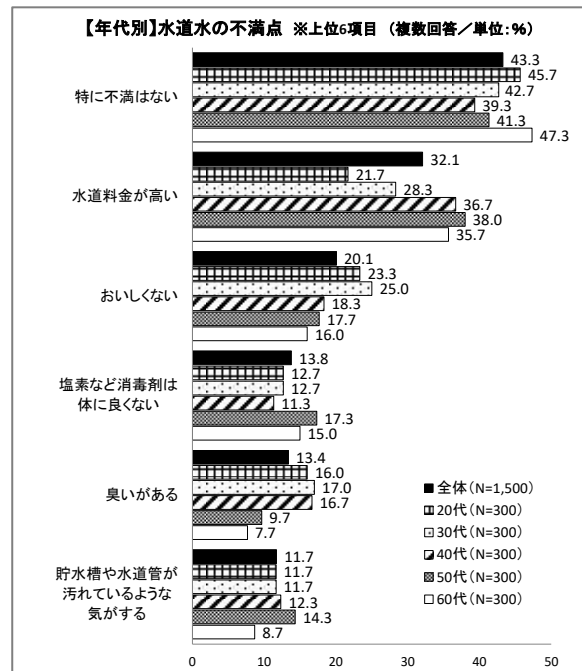
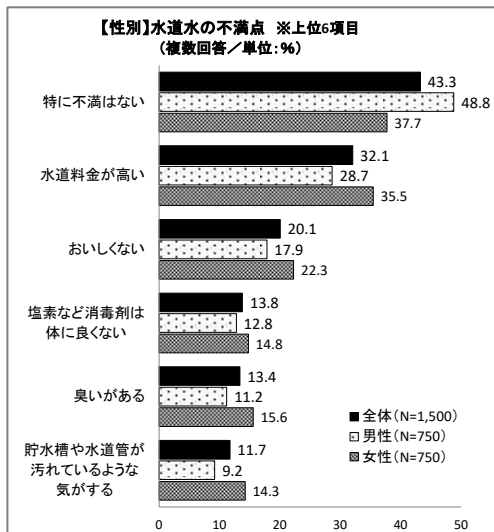
また、点数別回答率では、10点満点をつけた回答者が21.5%となり、昨年（10.3%）を大きく上回りました。



Q.水道水について不満を感じていることは？（8択+その他+特に不満はない）

◇20～30代は味、40～60代は料金により不満。

水道水への不満については、昨年と同様に「特に不満はない」（43.3%）が1位となり、2位（不満のトップ）は「水道料金が高い」（32.1%）、3位「おいしくない」（20.1%）、4位「塩素など消毒剤は体に良くない」（13.8%）、5位「臭いがある」（13.4%）と続きました。性別でみると、昨年は女性の1位が「水道料金が低い」でしたが、今年は、男女とも「特に不満はない」がトップ。ただし、男性（48.8%）と女性（37.7%）の数値に開きがある点は、昨年と同様でした。また、年代別では、「水道料金が低い」は40代～60代が、「おいしくない」は20代～30代が、それぞれ全体の数値を上回るなど、年代層による不満の違いがみられました。

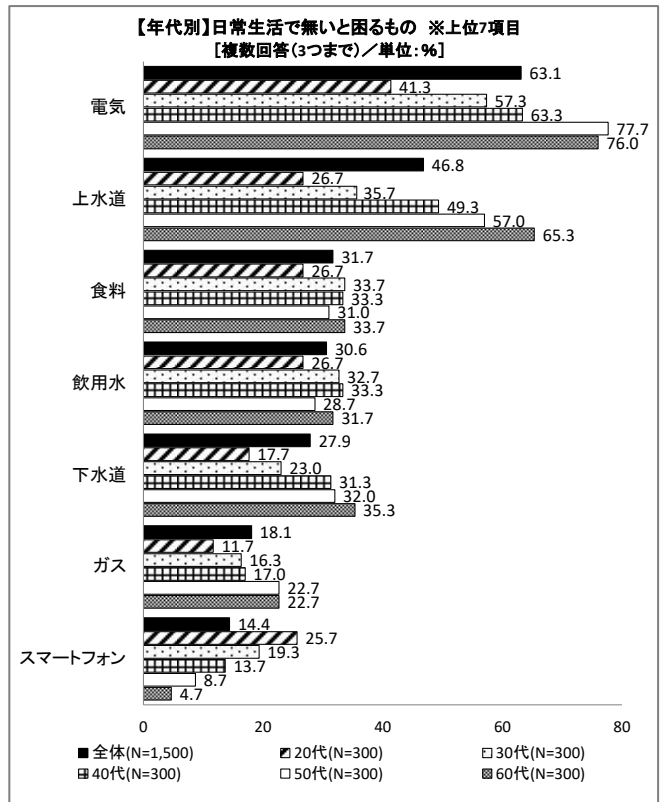
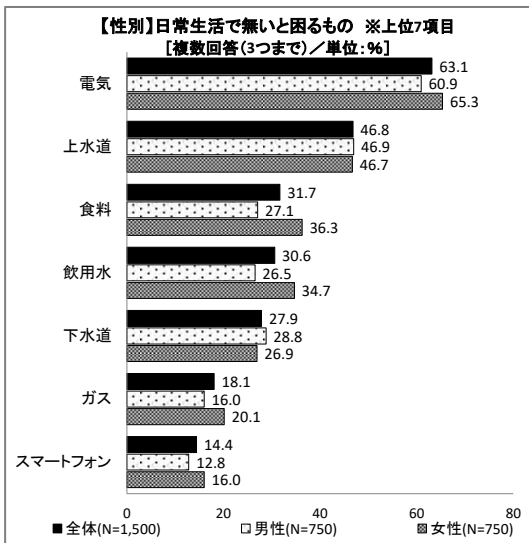


水と生活・文化

Q.日々の生活で無いと困るものは？（19択+その他+特にない）

◇無いと困るものトップ3は、1位「電気」、2位「上水道」、3位「食料」。

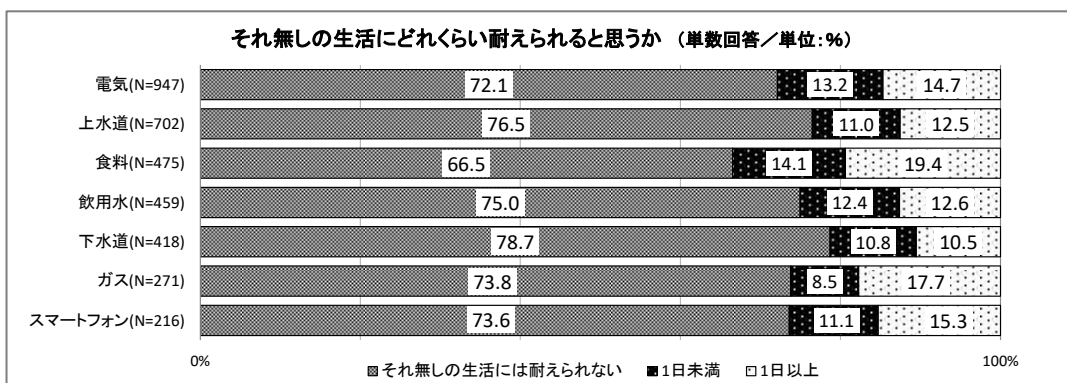
今回、生活者にとっての水の重要性を相対的に探る趣旨の新たな調査を実施。ライフライン、情報通信機器・サービス、メディア、飲食料などを選択肢にあげ、その中から3つを選んでもらう形式で、日々の生活の中で無いと困るものについてたずねたところ、「電気」（63.1%）が6割超で断然のトップ。2位「上水道」（46.8%）、3位「食料」（31.7%）、4位「飲用水」（30.6%）、5位「下水道」（27.9%）、6位「ガス」（18.1%）、7位「スマートフォン」（14.4%）と、上位7項目のうち、6位までをライフラインと飲食料が占め、それ以外は「スマートフォン」の7位が最高でした。なお、「電気」は、性別、年代別のすべてで1位、「スマートフォン」は、20代で4人に1人（25.7%）の回答があり5位となりました。



Q.それが無い生活にどれくらい耐えられると思うか？（3択）

◇「下水道」が無い生活には耐えられないと思う人が約8割。

前述の設定で選んだ各項目について、それが無い生活にどれくらい耐えられるかを、「それ無しでの生活には耐えられない」「1日未満（耐えられる時間を回答）」「1日以上（耐えられる日数を回答）」の3択でたずねたところ、上記7項目の中で「それ無しでの生活には耐えられない」の数値が最も高かったのは「下水道」の78.7%、最も低かったのは「食料」の66.5%でした。



◇耐えられる日数の平均は、最短が「飲用水」の1.6日、「スマートフォン」の3.7日が最長

上記で「1日未満」もしくは「1日以上」を選択した人が回答した時間・日数を合算して割り出した耐えられる日数の平均値は、最も短かったのが「飲用水」の1.6日（39.3時間）、最も長かったのが「スマートフォン」の3.7日（87.8時間）という結果でした。

それが無い生活に耐えられる日数(時間)の平均

電気	上水道	食料	飲用水	下水道	ガス	スマートフォン
2.3日 (55.4時間)	2.0日 (48.0時間)	1.9日 (46.0時間)	1.6日 (39.3時間)	2.2日 (53.9時間)	2.8日 (66.6時間)	3.7日 (87.8時間)

【何はなくとも】

猛暑に耐えねばならない上に、電力需給の逼迫で節電しなければならず、どのくらいエアコンを我慢しても健康が維持できるか試されている2022年の夏。早い梅雨明けで四国などでは水不足が懸念される中、梅雨の後の豪雨や台風による被害も心配される。一方で、30年前にはほとんどの人が使っていなかったのに、今ではなくてはならなくなった携帯電話の大規模な通信障害も生じて、普段はあって当たり前だが、無いと困る様々なサービスに我々の安全で快適な生活が支えられていることが改めて認識された。

そうした様々な社会的共通資本のうち、日々の生活になくてはならないサービスを3つ選ぶとしたら何か、と問われて皆さんは何を選択するだろうか。

1位は全体の約2/3の方が選んだ電気である。家庭や個人では車や暖房、調理以外のほとんどのエネルギーが電気で賄われていることを考えれば当然だろうし、風力や太陽光など再生可能エネルギー割合が増えてカーボンニュートラルな社会に向けた転換が生じるにつれ、ますます電気への依存度は高まり、その分、電気の安定供給への要求は高くなるだろう。

面白いのは、年齢別の回答である。若者がより電気に依存しているかと思いきや、50代以上の3/4が電気を選んでいるのに対して、20代では4割しか選んでいない。電気のない生活の大変さを知っているからこそ、電気のありがたみを感じているのだろうか。

2位の上水道を選んだのは半数弱の方々だが、60代の2/3が選んでいるのに対して、20代では全体の1/4と、差が大きくなっている。これも、上水道のない生活の大変さを知っているかどうかの問題だろうか。20代は、上水道が止まってもコンビニでペットボトル入りの水を買えばよいくらいに考えているのかもしれないが、飲用水は年代に関係なく選んだのは約3割の方々だけであり、手も洗えず、トイレも流せないような状況を想定したかどうか回答を分けたのだろう。

3位の食料、4位の飲用水では女性の方が選んだ割合が多い。家事労働がいまだに女性に押し付けられ、食事や水の確保が女性の責任とされている家庭がまだまだ多いのかもしれない。

各項目を選んだ方々の中では、いずれも7割程度の方々「それ無し生活には耐えられない」と回答しているが、中でも下水道では8割程度に達している。下水道を選んだ割合の順位は5位だが、トイレや雑排水を流せない生活の質の低下、あるいは水洗式ではないトイレの居心地の悪さをご存じの方々の回答なのだろうか。やはり年齢が上がるに連れて下水道を選んだ方が多くなっている。

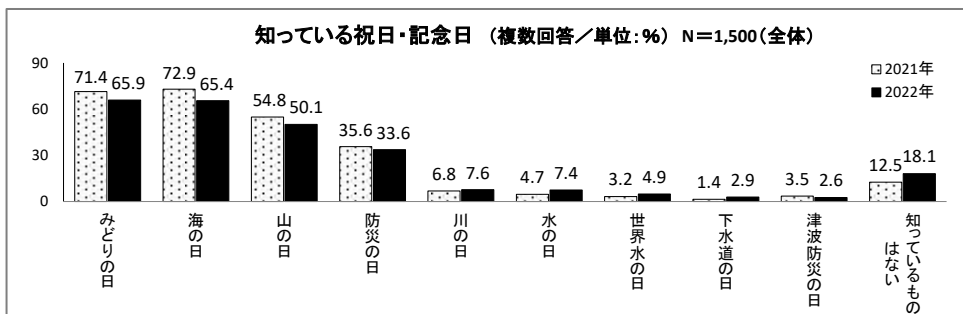
逆に、食料を選んだ方の中で「それ無し生活には耐えられない」と回答した方は2/3で一番低い。飽食の時代、食料がずっとないのは困るが、数日であればむしろ痩身につながる、と思う方もいる、ということなのかもしれない。

スマートフォンを選んだ方はわずかに全体の1/7であり、ガスについて7位。20代では4人に1人が選択しているのに対して、60代では20人に1人。上位のうちでは耐えられる日数もダントツで長く、4日近くに及ぶ。スマートフォンが無いと困るが、いざとなったらなくとも平気だ、と置いていらっしゃる方がまだまだ多いことがうかがわれる。

Q.知っている祝日・記念日は？ (9択+知っているものはない)

◇「水の日」の認知率が過去最高を更新。

水や自然にかかわる祝日・記念日の認知は、昨年、「水の日（8月1日）」の認知率が本設問の調査を開始した2016年以来、最も高い数値（4.7%）でしたが、今年はさらに2.7ポイント上積みされ7.4%となり、過去最高値を更新しました。また、「世界水の日（3月22日）」（4.9%）や「下水道の日（9月10日）」（2.9%）についても、それぞれ僅かながら上昇しました。当センターとしては、今後も「水の文化」に関するより一層の普及・啓発に取り組むとともに、その取り組みが、こうした水にかかわる記念日などの認知向上の一助になることを願っています。



沖大幹先生プロフィール

沖 大幹（おき たいかん）
東京大学 大学院工学系研究科 教授
「ミツカン水の文化センター」アドバイザー

1964年東京生まれ。1993年博士（工学、東京大学）、1994年気象予報士。1989年東京大学助手、1995年同講師等を経て2006年より同教授。2016年より国連大学上級副学長、国際連合事務次長補を兼務。専門は水文学（すいもんがく）で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。書籍に『水の未来』（岩波新書、2016年）、『水危機 ほんとうの話』（新潮選書、2012年）など。生態学琵琶湖賞、日経地球環境技術賞、日本学士院学術奨励賞など表彰多数。日本人として初の国際水文学賞Doogeメダル受賞(2021年)。



「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

創業の地である愛知県の知多半島は水が得にくい土地柄だったため、文化元年（1804年）の創業時より、良質な醸造酢をつくる為に山から木樋で水を引くなど、水の苦勞を重ねてきました。また、廻船で尾張半田から江戸まで食酢を運んで社業の基礎を築くなど、水と深いかかわりを持ってまいりました。

このように創業以来、「水」の恩恵を受け、「水」によって育てられてきたミツカングループは、1999年に「水の文化センター」を設立し、「水」をテーマとする社会貢献活動を行なっています。

「水にかかわる生活意識調査」は、1995年にセンターの活動開始に先駆けて、「日常生活における水とのかかわり」について調べてみようと考えたのがきっかけで始まり、さまざまな生活の中での水への意識を、四半世紀にわたり調査し発表しています。